# 揺れるエスニック・アイデンティティ 在日日系ブラジル人の場合
## ――エスニック・アイデンティティ再構築過程の分析――

坪田典子

### 一、はじめに

来日した日系ブラジル人は日本での経験を通して自らのアイデンティティに動揺をきたし、自分は何者なのだろうかという根源的な問いを突きつけられて葛藤に陥り、その後新たな形でエスニック・アイデンティティを再び形成して行く1)。

本稿ではこのような日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティが再構築される過程に焦点を当て日系ブラジル人の「客観的」現実（日系ブラジル人によって把握され認識された現実）とその自己（エスニック・アイデンティティ認識を含む）が、日本人との直接的・間接的相互作用を媒介として変容、構築されていく過程を具体的事例を用いて分析する。

言い換えるならば日系ブラジル人が具体的生活場面でアイデンティティの揺れを経験しながら自らのアイデンティティを選択し構築していくその過程を分析する。そしてそのことを通して日本社会における日系ブラジル人の内的構造の独自性に論及する。その際相互作用関係をより明確に把握するため「場」という概念を使用する。

なお本稿は一九九五年六月から一二月にかけて筆者が実施した日系ブラジル人調査から得られたデータに基づいており2)、日本における日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティというレベルで考察を加えたものである。

### 二、「場」

#### 1、「場」の形成

日系ブラジル人個々人と日本社会の住民個々人との間

で行われる相互作用場面、例えば地域社会、学校、職場、またはある出来事の引き起こされた直接的・間接的場面を「場」とする。この「場」は現実の相互作用場面であり、「場」を構成する各々の主体の背後にある生活史（経験）を通して主体（あるいは主体に影響を与えた両親を含む人々）が生きてきた過去の歴史と場所（出身地）に繋がっており、新たな生活史を構築していく未来へと連結している。

すなわち「場」は、ある出来事が生起している＜いま・ここ＞という時空間に関わる概念であり、そこでは日本人側の行為者との相互作用が進行中である。相互作用の「場」である＜いま・ここ＞には、3種類の時間の様式が存在している3)。すなわち、いま・ここに連らなる線形的な時の流れである過去と未来の繋点としての歴史的な時間と、相互作用の相手である日本人側の行為者との間主観的な時間、それに主体の過去の経験の中の人生の時間が、併存しうる時空間である。

空間的には日系ブラジル人の出身地であるサンパウロや出身国であるブラジル、それに両親、祖父母の出身国である＜日本＞に連なっており、相互作用が行われている現実の日本との接点をなす空間に関わる概念として「場」がある。

「場」は、「場」を構成する主体の間で創造され形成されていくものであり、そのような「場」における日本人との直接的・間接的相互作用の中で日系ブラジル人の客観的現実や「場」を構成する人間関係が創造され変容され、その過程で日系ブラジル人の自己が検証され新たに構築されていく動的な概念である。

## 2、語りの「場」

### ―インタビューにおける語り手と聞き手―

インタビューでは調査対象者の語りを通して「場」が形成される。調査者は調査対象者の語りを聞くことによってのみ彼／彼女らの経験に接することが出来、聞くことを通して推論したり解釈はするが、決してその経験を知ることは出来ない。それはその経験が過去の＜あのとき・あそこ＞に規定されて存在しているので、語りを通してしか第3者には知り得ない事柄だからである。

桜井（一九九二、一九九五）はE.Bruneriにならて生を3つの様態に分けて説明している。＜暮らしとしての生(life as lived)＞、＜経験としての生(life as experienced)＞、＜語りとしての生(life as told)＞であり、各々は互いに対応している。

＜暮らしてしての生＞とは、現実に起こっている外的

な行動の現れのことで第3者に把握可能なものである。＜経験としての生＞とは、個人に主観的な生で第3者が直接把握することが出来ない。＜語りとしての生＞とは、語り手のライフストーリーのことで語りの行為の文化的慣習、聞き手との関係、社会的文脈等によって左右されるものである。

インタビューでは語り手と聞き手によって「場」が構成され、インタビューを行っている＜いま・ここ＞で調査対象者によって＜語りとしての生＞が語られる。語り手の＜語りとしての生＞は、過去の世界＜あのとき・あそこ＞に属する＜暮らしとしての生＞と＜経験としての生＞が言語によって媒介されて＜いま・ここ＞に引き出されたものである。過去の世界に属する生が言語によって現前化されるとき語り手による解釈作用で変形される。この変形を加えられたものが＜語りとしての生＞として語られるのである。

しかし言語化による解釈作用を経過するからこそ人は何度も過去の生を生きることが出来、それによって新たな経験を生きることが可能になる。すなわち経験、特に、重要な経験、契機となるような経験、自己のアイデンティティを確立する際の拠り所となるような経験は、主体の中で幾度となく思い返され吟味され解釈し直されて、新たな経験として主体の中で相対的に主体の歴史的現実を超越したものとして存在するようになる。四章の具体的事例ではこのような＜語りとしての生＞が語られている。

## 三、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ再構築

### 1、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ形成過程とエスニック・アイデンティティの重層構造

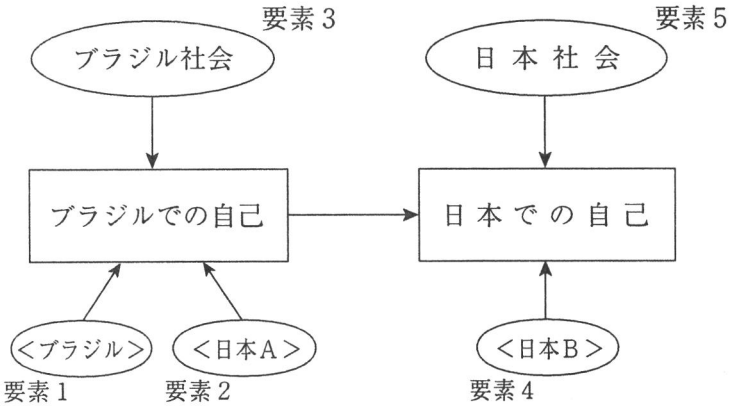
ここで本稿のテーマである日系ブラジル人とエスニック・アイデンティティについて以下のような観点から使用することを断っておきたい。日系ブラジル人に関しては移民としてブラジルに渡りブラジル国籍を取得していない一世やブラジルと日本両方の国籍を持つ人たちをも含めたより広い概念として、生活基盤のあったブラジルから来日し現在日本で生活基盤を持っている人という意味で使用する。なお日系ブラジル人という言い方はブラジルでは使用されていないが本稿では便宜上彼／彼女らを日系ブラジル人と呼ぶこととする4)。

エスニック・アイデンティティとは出自と文化的アイデンティティに関わる集合概念で他者認識を通して得ら

れる自己認識 ―― ここでは日系ブラジル人が自分自身をどう規定しているか ―― という意味で使用する。すなわち、日系ブラジル人が自らの主観において自分自身をブラジル人だと規定しているか／いないか、日本人だと規定しているか／いないか、ブラジル人と日本人に関連した概念上の規定をしているか／いないか（例えば日系ブラジル人、二文化人等）、あるいはブラジル人、日本人とは関連性のない概念上の規定をしているか／いないか（例えば世界市民、地球市民、第三文化人間5）等）、という自己認識をさす。

図1は日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティが形成される過程を図示したものである（図1は「日系ブラジル人の自己」に影響を与える方向のみ矢印で記す）。各要素の説明は以下の通りである。

図1　日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ形成過程



要素1は、日系ブラジル人がブラジル社会でポルトガル語を母語として成長する過程で自然な形で身につける行動の基準枠 ―― 価値観、考え方、感じ方、行動のパタン等のいわゆる広義の文化6) ―― を表しており、マジョリティのブラジル人と共通項のある存在である。この要素1を＜ブラジル＞と表現する（以後＜＞は日系ブラジル人がその主観においてイメージし特徴づけた＜＞内の広義の文化をさす）。

要素2は、日系ブラジル人がブラジル社会において家庭や日系社会で社会化された何らかの日本性をさし、日本人にルーツを持つことからくるものでマジョリティのブラジル人とは共通項のないものである。この日系という成育過程から形成される要素2を＜日本A＞とする。＜日本A＞は現実の日本に接する前に形成された理念上の構成物である。

要素3は、ブラジル社会というホスト社会側のエスニック・マイノリティである日系に対する認識や態度である。これはマジョリティのブラジル人が日系をどのように位置づけているかということに関連しており要素1の＜ブラジル＞と要素2の＜日本A＞の形成に影響してブラジルでの「日系ブラジル人の自己」に影響を及ぼす。

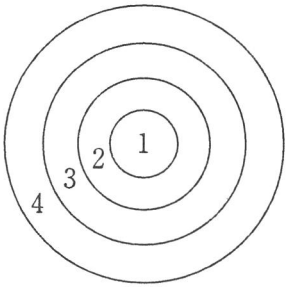
要素4は、来日後の日本社会で生活する中で新たに形成される日本性であり＜日本B＞とする。これは実際の生活に即して形成される現実的なもので、来日前の理念化された＜日本A＞と対照される。ブラジル時代に理念化されて形成された＜日本A＞と日本での実生活に即して形成された＜日本B＞の存在が日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ形成に重要な意味を持つ。

要素5は、日本社会というホスト社会側のエスニック・マイノリティである日系ブラジル人に対する認識・態度である。これは日本社会のマジョリティの日本人が日系ブラジル人をどのように位置づけているかということと関連しており、要素4である＜日本B＞の形成に影響し日本での「日系ブラジル人の自己」に影響を及ぼす。

来日前に日系ブラジル人の「ブラジルでの自己」形成に影響を及ぼすのは＜ブラジル＞と＜日本A＞である。来日後に日系ブラジル人の「日本での自己」形成に新たにインプットされるのが＜日本B＞である。＜日本B＞は理念的な＜日本A＞と異なり日本での実生活の中で形成される現実的なものであり、しばしば人生の契機となるような出来事から形成されている。この＜日本B＞が＜ブラジル＞と＜日本A＞に加わりエスニック・アイデンティティの再構築過程で相互に複雑に作用して、日系ブラジル人の「日本での自己」が形成される。

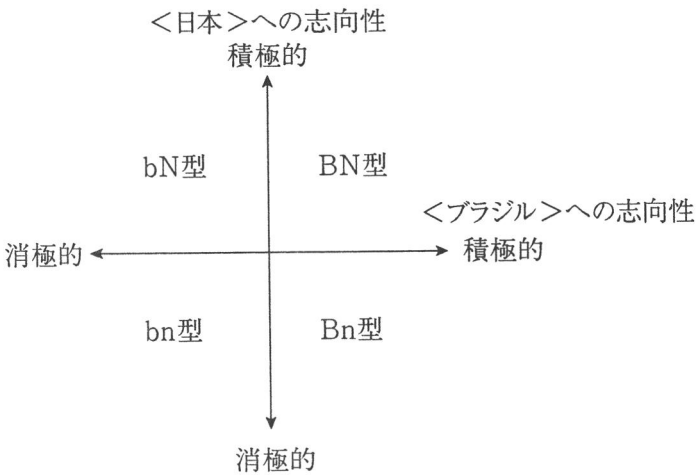
以上、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティの形成過程についてみてきたが、エスニック・アイデンティティ自体は図2のように重層構造をなしている。すなわち、個人としてのエスニック・アイデンティティ、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ、日系のエスニック・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ一般が図2のような重層構造をなして、各レベルを構成していると考えられる。本稿ではこの中の日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティというレベルで論を進める。

図2　エスニック・アイデンティティの重層構造




1:個人のエスニック・アイデンティティ
2:日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ
3:日系のエスニック・アイデンティティ
4:エスニック・アイデンティティ一般

図3　日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ類型



## 2、日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ類型

坪田（一九九七）は集団としての日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ類型を以下のように規定している。図3はこれを図式化したものである。

1）BN型：＜日本A＞と＜日本B＞の不連続性→日本人性否定→ブラジル人性認識→＜ブラジル人性肯定＋日本人性＞

2）bN型：＜日本A＞と＜日本B＞の連続性→＜ブラジル人性否定・日本人性肯定＞

3）bn型：＜日本A＞と＜日本B＞の不連続性→＜ブラジル人性距離・日本人性距離＞

4）Bn型：＜日本A＞と＜日本B＞の不連続性→＜ブラジル人性肯定・日本人性否定＞

1）のBN型は、4類型のうち日系ブラジル人に最も典型的に現れる型である7）。析出過程は先ずブラジルで親や日系社会の影響下で＜日本A＞を内在化し＜日本人＞を準拠集団としていく。次に来日して＜日本A＞と＜日本B＞との不連続性により葛藤を経て＜日本人＞を否定し＜ブラジル人＞という自己認識へ到達する。その後＜日本人＞を否定したことで葛藤し最終的にルーツとしての日本人性を＜ブラジル人＞の中に入れた形を準拠していく。

2）のbN型は、BN型への漂流が見られBn型と対極に位置する。来日前の析出過程はBN型と同じである。来日後はBN型と典型的な差が見られBN型と反対に＜日本A＞と＜日本B＞との連続性からその同質性を認識し新たに＜日本人＞を準拠集団としていく。

3）のbn型は、来日前も後もエスニック・アイデンティティを自己のアイデンティティのひとつに過ぎないと相対的に捉えている。来日後は＜日本A＞と＜日本B＞との不連続性により、またエスニック・アイデンティティが強調されやすい日本社会の現実により、エスニック・アイデンティティ以外のものを準拠集団としていく。

4）のBn型は、bN型と対極に位置する型である。来日前の析出過程はbN型やBN型と反対でマジョリティのブラジル人としてのブラジル人性を内在化し準拠集団としている。来日後は両親に見られる日本人性から抽出された＜日本A＞と＜日本B＞との不連続性から一層＜ブラジル人＞を準拠集団として

いく。

本稿では日系ブラジル人の類型の中で量的に最も多くかつ典型的な型であるBN型の中から分析のための事例を採り上げる。

## 四、揺れるエスニック・アイデンティティ―Eの場合―

ここでは事例（Eとする、女性、三〇歳、滞日四年、二世、専門デザイン）8）からエスニック・アイデンティティ葛藤の象徴的な出来事を採り上げ、次にエスニック・アイデンティティ再構築過程における象徴的な言葉を抽出して、事例であるEの客観的現実とエスニック・アイデンティティの変容をみつめ再構築過程を分析する。　以下「」は具体的な引用をさす。

### 1、事例Eの位置づけと分析枠組み

この事例を選んだ理由は、来日した日系ブラジル人の中で最も多い型BN型に属し、困難を乗り越えて自己を構築していった様子が典型的に展開しているからである。分析枠組みとして坪田（一九九七）による日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティ類型（図3）を使用している。

### 2、Eの象徴的経験

(1)Eの来日経過

1回目来日α県県費研修生→帰国→2回目来日β県企業研修生→名古屋→帰国→3回目来日β県日系人労働相談コーナー（筆者とのインタビュー時）

Eは1回目α県の研修生として初来日し、Eの言葉によると「日本のいいところだけ見て帰った」。帰国後再来日を希望し2回目β県の新しい研修制度で来日した9）。

(2)経験された「場」＜あのとき・あそこ＞―県庁担当者とEとの相互作用―

1）状況

県庁責任下における6カ月間の企業研修中、5カ月目に研修先の会社から研修だけで終わらせてほしいということで県庁がEの仕事の受け入れ先を探している。そんなときEの仕事中に県庁担当者から電話がかかる。

2）県庁担当者との相互作用場面　（Kは県庁担当者、Eは事例の日系ブラジル人）

1　K：「m（自動車製造会社）の自動車部品組立の仕

事がある。今日面接することになっている」。

2　E：ほんとに私が出稼ぎでお金が必要ならかまわないけどそうじゃないので断った。

3　K：「断るのなら研修はそこで終わって切ってください。断ると仕事がないですよ。仕事がなくて帰るんだったら契約違反だから帰りの旅費は自己負担になります。航空料金が払えないなら親に連絡して払ってもらいます」。

4　E：親にそんなことは言えないので、「それなら研修を切って自分で働いて航空料金を払わせてもらいます」。

5　K：「あなたはできません。日本語が出来ないからあなたが働くのは無理です」。

3）解釈　（下線部はEの行為）

1Kで県庁側担当者は、2つのことを無視して論を進めている。先ずこのプログラムが専門を生かした企業研修であるのにEの専門が全然考慮されていない。次にEの承諾なしにEが面接を受けることを前提として企業側との面接を設定している。

3Kでは、Eに仕事がない場合Eには保証人がいないということでありこのことは日本では必然的にEの帰国を意味している10)。しかもこの時点でEが帰国するということは県庁との契約違反になりそれゆえ帰路の航空運賃は自己負担になる。このような状況を念頭に置いて県庁側の言語行為をみるとそれは脅迫行為ともいえるものである。

5Kでは、3Kで県庁担当者がEに帰りの運賃を自己負担するように言っておきながら、自分で働いて航空券を払うというEの申し出（4E）に対して、現在のEの日本語能力では県庁を離れて働くことは無理だと言っている。ここで県庁の申し出を断ったEに対して県庁担当者のとった行為は以下のような状況にEをおくことになる。

仕事がない→帰国以外に選択肢なし→帰国のための航空運賃の自己負担→Eが働いて払う以外にない→日本語能力未熟のためEが県庁の紹介以外で働くことは不可能。

仕事がなく帰国しなければならず、帰国のための航空運賃を負担しなければならないEにとって残された道は、→Eは県庁の紹介で働く以外にない→Eは県庁担当者から提案された自動車の部品組立の仕事（1K）を断らないで受ける、ということ以外に何の選択肢も残されていないという構図がこの時点で成立することになる。

1Kにおける県庁側のEの専門に対する配慮のなさ、

何でもいいからとりあえず仕事を提供する、しかも本人の承諾は二の次という本人無視の態度は、技術研修の機会を与えるものと与えられるものとの関係性に上下関係を導入し、上に立つものの提案は下に位置するものに当然受け容れられるべきだとする推論が働いている。

3Kと5Kには、県庁側の提案を受け入れる以外にすべての可能性をEから剥奪することを意味する排除のメカニズムが働いている。これはEの生きる選択肢を奪うという意味で脅迫行為といえる。

県庁担当者は、実際にはEを追いつめる意図はなかったかもしれない。多分なかったであろう。なぜなら後に述べるようにその後もEの為に仕事を探しているからである。しかしながら、ここで問題にしたいのはそのような意図があったかなかったかではなく、出来事の中で無意識裡になされる行為の意味である。無意識のうちに内在するメカニズムとその問題性をこそ問題視したいのである。

その後、Eは友人の日系ブラジル人Mから当時Mが就いていた「β県日系人労働相談コーナー」の仕事――筆者とのインタビュー時のEの仕事――を紹介されるがそれが県の仕事であるため断る(a)。県庁からは次にファッション関係の仕事を紹介された。Eは「そこはホテルみたいにきれいなところで、ここだったら私がOKすると県庁が思ったんだと思う」と語る。Eは面接時に、そこでの仕事はやりたい仕事とは違うこと、Eが現在おかれている状況等を正直に話した。そこの工場長に「あなたを助けることが出来るなら1カ月でも2カ月でもいてください」と言われ、1カ月間そこで働く。

それから名古屋に通訳の仕事が見つかり、「β県を離れたくてしょうがなかったから、遠くの方がよかったので名古屋に移った(b)」。名古屋で1年10カ月働いた後帰国し、3カ月後もう一度やり直すためかつて友人Mから依頼された「β県日系人労働相談コーナー」の仕事を引き継ぐため来日する。この仕事についてEは「今やっている仕事もいろんな経験があったからこそ出来ると思っている」と語っている。なお帰路の航空料金自己負担については最終的には県庁によって支払われた。

### 3、Eのエスニック・アイデンティティ再構築過程

(1)インタビューの相互作用過程でのEの象徴的な言葉

1)＜日本人＞からの揺れと離反

①「そのころ(四章2のEの象徴的経験後から名古屋時

代）はβ県、日本がいやでたまらなかった。日本人の顔を見るのもいやだった」

②「県費研修や留学で来る人にはホイホイという扱いだけど、そうじゃないと随分扱いが変わってくる」11）

③県庁の人はほとんど仕事を探してくれなかったと思う。ほんとに探していたらMの仕事もあった」

④「日本人は冷たい」、「ブラジルでは日本人たちは差別とかそんなのはない」

⑤「日系の人は日本人かブラジル人か迷うが、私は日本に来て初めてブラジル人だと思った」

2）解釈（以下、解釈部分の⇓は、移行、→の右は、左側の認識の根拠、～は、揺れを表す）

①②③④：　Eの客観的現実：＜日本A＞⇓マイナスの＜日本B＞

Eの客観的現実が日本での様々な経験により＜日本A＞からマイナスに彩られた＜日本B＞に変容する契機となる行為である。その結果、β県、日本、日本人がいやでたまらなくなり物理的、心理的に離反していく。2章の(2)、3）下線部a）、b）はその結果Eの選択した行為である。

⑤：Eの自己認識：＜日本人（↑＜日本A＞）＞⇓＜ブラジル人（↑マイナスの＜日本B＞）＞

Eの自己認識が＜日本人＞から＜ブラジル人＞へと変容している。＜日本人＞から離反した結果＜ブラジル＞へ揺れ、来日前のブラジルでは意識することのなかった＜ブラジル人＞としての自己認識へと到達する。

3）再び＜日本人＞への揺れ

⑥「いやならどうして帰らないのとみんなに言われたが日本と日本人を好きになってから理解できるようになって帰りたいというのがあった」

4）解釈

⑥：Eの自己認識：＜ブラジル人＞～＜日本人（↑＜日本A＞）＞

マイナスのイメージで覆われた＜日本B＞により＜日本人＞を否定し＜日本人＞から離反し、＜ブラジル人＞という認識に至っても＜日本A＞によって培われた＜日本人＞棄てきることが出来ないで揺れている。

5）相対化と止揚

⑦「ずっとブラジルだけだったらブラジルのいいところ

も見えなかった。ブラジルの悪口をいつも言っていた。日本に来てからブラジルのいいところも見えてきた」。

「ここに来たブラジル人はブラジル人だけのグループを作っている。日本人の悪口とかを言っている。それは両親たちの繰り返しではないか」

⑧「ブラジル人だけがいるところに行ったら自分が変になる、話が合わない、何か日系の方つき合いやすいと感じていた。日本に来て自分はブラジル人だと思う。一時帰国したとき日系がいないパーティに呼ばれたが以前よりもしゃべるのに自信があった」

⑨ルーツは親からせっかくもらったものだから子どもにも教えていく。自分の子どもにも日本語を教えたい。自分の中に子どもの時に絵本や歌を教えてくれたのが残っているから、そういうふうなのをやりたいなと思う」

⑩「日本がいやだった時期はすごくいやだった。いやだと思っていたらどんどん悪くなるから理解しようと、わかるよりも日本人は日本の文化はこれなんだと、今は受け容れることが出来たと思う」

6）解釈

⑦：移民世代のブラジルにおける日本人と現在の日本における日系の問題を対照し相対視している。

⑧：Eの自己認識：来日前の自己＋自信

相対視と止揚の過程で得られた新たな自己認識で、かつての自己に自信が加わっている。

⑨：Eの自己認識：

＜日本人＞⇓＜ブラジル人＞〜＜日本人＞

⇓＜ブラジル人＋日本人性＞

来日して＜日本人＞から＜ブラジル人＞という自己認識に変わり、その後再び＜日本人＞への揺れ戻しを経て、新たな形で＜ブラジル人＞という認識の中に日本人性を生かすことが出来るようになった状態である。

⑩：Eの客観的現実：マイナスの＜日本B＞⇓あるがままの＜日本B＞

＜日本人＞と＜ブラジル人＞、＜日本A＞と＜日本B＞、＜ブラジル＞の間を揺れ動き、行きつ戻りつしながら相対視と止揚を経てあるがままの現実を受け容れている状態。

## 五、「場」を構成する日系ブラジル人と日本社会の成員

### 1、日系ブラジル人の客観的現実と自己の変遷過程

「場」を構成する主体間の相互作用の中で、具体的な人間関係の中で、主体の認識の枠組みの転換が行われる。「場」における相互作用の中で、象徴的出来事をきっかけにあるいはその集積により、日系ブラジル人個人の客観的現実が変化していく（r→r1→r2→r3→…）。と同時に個人の内面もそれに対応して修正され創造され変化していき（s→s1→s2→s3→…）、アイデンティティが個の側において相即的に形成されていく12）。

前述の事例Eの場合では、日本人との相互作用の「場」を媒介としたEの客観的現実とアイデンティティ変遷過程は次のようになる。日本人との「場」が形成されるということは、相互作用を通して「場」を構成している主体の一方である日系ブラジル人Eの客観的現実が、関係性の中で相即的に形成されるということである。すなわち客観的現実は、＜日本A＞に基づいたものから、象徴的出来事をきっかけにマイナスに彩られた＜日本B＞に基づいたものへ変化し、長い葛藤の時間を経てあるがままの＜日本B＞に基づいたものへと変化していっている。

そして同時に相互作用の中で関係を作っているE個人の内面もまた相即して形成され、エスニック・アイデンティティは、＜日本A＞に基づいた＜日本人＞から象徴的出来事を契機にマイナスの＜日本B＞に基づいて＜ブラジル人＞へと変化し、その後＜日本人＞への揺れの中で＜日本人＞と＜ブラジル人＞の間を行きつ戻りつしながら＜ブラジル人＋日本人性＞へと変化していっている。

## 2、文化のイデオロギー

ここでEの客観的現実やアイデンティティ変容に決定的な影響を及ぼした象徴的出来事（四章2の(2)参照）について考えてみたい。それはEの人生の契機となるような出来事であり、アイデンティティ確立の際に常に舞い戻り拠り所となるような経験であるが、それが引き起こされた背後にはどのような論理があるのだろうか。

県庁担当者との相互作用場面で、県庁側が、研修の機会を与える側と与えられる側、援助する側とされる側という関係性の中に上下関係を持ち込んでいる。上下関係には当該文化に浸透している上下に基づく縦の序列があり絶対性が付与されている。相互作用の場には、上記のような上下関係から必然的に推論されるメカニズムが作用している。

すなわち、上下関係が成立する関係性の中では、援助される側は常に劣位に置かれるので、上位者の提案は下位者に受け容れられるべきだとする推論が働く。上位者は、下位者に対して援助される存在として従うことを当

然のこととして要求する。そして下位者がこのような従順性を示す限りにおいて援助する－されるという関係性を成り立たせている。下位者がこの従順性を示さないとき、すなわち上位者にとって当然とされていることに反する場合は、排除の論理が作用する。

Eの象徴的出来事における県庁担当者の行為（配慮のなさ、無視、脅し等）は、無意識の行為でありとっさの反応である。県庁担当者の中で、県庁側＝援助する側＝上位、上下関係の序列が成立、上下関係の序列の中では当然のこととして下位者に従順性を要求、下位者は提案を受け容れるべき、さもなくば排除、といった一連の判断、推論が無意識のうちに作動している。

これは、行為の社会的条件の中に一連の判断、推論を産出させるメカニズムが存在しており、結果的に支配の権力として作用していると考えられる。Eの残された選択肢を考えるとき、江原（一九九五：一八）の支配の定義が意味を持ってくる。すなわち、「支配とは最終的に個人が社会的実践において選択しうる選択肢の幅を著しく制限することで、個人の自己決定権を侵害することである」。

この結果として産出された支配の権力をも行使する側にとっては当然とする論理が働いている。「援助する」、「技術研修の機会を提供する」という行為自体の中にこのような支配の権力を自明視する条件がすでに埋め込まれている。このことは自明視されているために、受ける側にとっては権力として自覚されるのに、行使する側にとっては権力として認識されることはない。そこには、当該文化のイデオロギーを無意識のうちにその成員に浸透させていくような装置13）が働いており、通常それは支配的カテゴリーとして当該文化の人々の行為や考えを呪縛しているのである。

## 六、おわりに
### ――日系ブラジル人の独自性について――

日本社会において各々の日系ブラジル人は、日本人との相互作用場面である「場」という具体的生活場面においてアイデンティティの揺れを経験し、その揺れの葛藤の中から最終的にエスニック・アイデンティティの4類型（三章の2参照）を選択していく。エスニック・アイデンティティがこの4類型に分かれるという事実は、日本における日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティに特有のもので他の在日外国人のエスニック・アイ

デンティティとは構造的に異なっているものである。

それは、ブラジルでの成育過程で身につけた理念的な＜日本A＞の存在と、来日後日本人との相互作用で獲得された現実的な＜日本B＞の存在、それにブラジル社会で育まれた＜ブラジル＞が、日系ブラジル人の日本におけるエスニック・アイデンティティ形成に三重に折り重なって複雑に作用するからである。日系ということに原点を持つ理念的な＜日本A＞の存在が日系ブラジル人の主観的な状況規定にとって機能する結果である。人は予め与件として与えられた境遇から逃れることはできない。

この三重の作用の結果、日本における日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティは、他と比べてより複雑で屈折性を帯びたものとなる。この意味で日系ブラジル人はエスニックな存在であり日系以外の在日外国人とは異なったアイデンティティの在り方をしているといえる。ここに日系ブラジル人のエスニック・アイデンティティの独自性をみてとることが出来る。

（注）

1）実際には来日した全ての日系ブラジル人がアイデンティティを再構築していくわけではなく、失意のうちに帰国する人たちもいれば、日本にいても再構築できないで揺れと葛藤の中にいる人たちもいる。坪田（一九九六、一九九七）はエスニック・アイデンティティを再構築していった人たちを対象にしている。

2）インタビューを中心に参与観察を加えた調査で詳細は以下を参照。［坪田、一九九六］

3）桜井は語りにおける言葉の世界の位相を意味領域との関わりで説明している。［桜井、一九九二：54－59］：［桜井、一九九五：230－237］

4）彼／彼女らはブラジルでは、japones(日本人）と呼ばれている。

5）二文化人、第三文化人間という概念については江淵（一九九四）が異文化適応に関して説明している。［江淵、一九九四：89－120］

6）広義の文化という考え方は狭義の文化に対応したもので、Hofstedeによる。［Hofstede一九九一（一九九五）：2－20］

7）BN型が多いということは、日系ブラジル人が日系という出自に規定された存在であることから帰結されるが、坪田（一九九六）の調査結果もそれを実証している。調査対象者二〇名のうちBN型（11人）、Bn

型（5人）、bN型（3人）、bn型（1人）であった。

8）一九九五年一一月一五日のインタビュー記録による。四章はこのときのEのデータに基づいて構成されている。

9）データの客観性を裏付けるため、Eと同期の県庁企業研修生1名と一九九五年度の県庁企業研修生1名のインタビュー記録に基づいて構成されている。この制度は、6カ月間企業研修をした時点で県庁と縁が切れ、責任が企業に移り当該企業と2年間の雇用契約をしてそこで正式社員として就労するというものであった。バブル経済期に発案されたが実際の制度が発足したときは経済衰退期にあたり、Eたちの初年度が最初で最後になりその後形を変えて一九九五年度まで実施された。Eたち初年度の研修生7名のうちうまくいったのは2名だけであった。県費研修とは、外務省から補助金を受けた海外技術研修員制度のことで中堅指導者を受け入れており全国47都道府県で実施されている。企業研修とは、β県ではブラジルからの研修生を対象に実施されていた。

10）従来は入国および在留期間更新の際に身元保証書が必要であったため外国籍の人に対しては身元保証人が必要であったが、一九九六年度の中頃より全国的に廃止され、経費の至便のみでよくなった（一九九七年九月、入国管理事務所による）。

11）Eの6カ月間企業研修時に、同じ会社にいた県費研修生とEに対して、「会社の人の態度が全然違った。会社の人から聞いた話では、もう1人は研修できているけど、私の場合は出稼ぎできているということだった」と語っている。日本人側の認識で「出稼ぎ」がマイナスとして捉えられて「研修」と対比され、日本人側の態度もそれと対応して表出されている。

12）rはreality、sはselfの略である。

13）山田（一九九二）は、文化のカテゴリーをその成員に知らず知らずのうちに浸透させていくようなもの、そして支配的カテゴリーとして人々の行為や考えを呪縛しているものを、江原（一九九八）の造語を使って「権力作用」と呼んでいる。ここではこのような「権力作用」を「装置」と呼ぶ。［山田、一九九二：71－75］

**（文献リスト）**

江原由美子一九八八、『フェミニズムと権力作用』勁草

書房．
江原由美子一九九五、『装置としての性支配』勁草書房．
江淵一公一九九四、『異文化間教育学序説』九州大学出版会．
福岡安則一九八七、「聞き取りの意味－調査者／語り手／読者にとって－」福岡安則・江嶋修作等編著『被差別の文化・反差別の生きざま』327－340明石書店327－340
福岡安則一九九三、『在日韓国・朝鮮人』中央公論社．
Goffman,G. 1963. Stigma. Simon & Schuster Inc.
船津衛一九七六、『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣．
船津衛・宝月誠一九九五、『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣.
原尻英樹一九八九、『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂．
Hofstede,G. 1992. Cultures and Organizations:Software of the Mind. McGraw-Hill International(UK)Ltd.（岩井紀子・岩井八郎一九九五、『多文化社会』有斐閣）
Hutnik,N. 1986. Patterns of ethnic minority identification and modes of social adaptation. Ethnic and Racial Studies. 9(2)April: 150－167
古屋野正伍・青木秀男一九九五、「日記分析における「個人対歴史」の問題」『人間科学論及』第3号　常磐大学：66－76
中根光敏一九九七、「＜構築主義＞以後の社会問題研究の社会学的課題」『社会学者は2度ベルを鳴らす－閉息する社会空間／熔解する自己－』松籟社：52－84
野田浩資一九九一、「相互作用論の重層性」『ソシオロジ』112：21－36
大庭絵里・中根光敏一九九一、「社会問題の社会学の構築をめざして」『ソシオロジ』112：71－85
李光一一九八五、「エスニシティと現代社会」『思想』730号：191－210
桜井厚一九九二、「会話における語りの位相－会話分析からライフストーリーへ－」好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』　世界思想社：46－68
桜井厚一九九五、「生が語られるとき」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文社：219－248
坪田典子一九九六、『在住日系ブラジル人と日本社会－エスニック・アイデンティティを鍵概念として－』広島大学大学院日本語教育学科博士課程前期論文
坪田典子一九九七、「在日日系ブラジル人のエスニック

・アイデンティティ」『日本都市社会学会年報』15：117－131
山田富秋 一九九二、「精神医療批判のエスノメソドロジー」，好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』世界思想社：70－87